

学校部活動剣道指導の方向性と課題

(公財) 日本中学校体育連盟剣道競技部長 山下 克久

1 方向性

日本中体連剣道競技部では、中学生が最大の目標とする全国大会において、「申し合わせ事項」を策定し、各ブロック大会や各都道府県大会、更には各都道府県内の地区大会でも、同一歩調で運用していけるよう努めています。

この「申し合わせ事項」は発達段階を考慮したグランドルールであり、生涯剣道の基礎を正しく学ぶために定めたものです。しかしながら、ブロック大会や都道府県大会に浸透させることは、日頃の指導の積み重ねによる点が大きく、容易なことではありません。

そこで、毎年全国大会終了後に、ブロック長会議や審判会議・審判講習会で出た課題や成果を集約し、「申し合わせ事項」に係る解説を追加したり、努力事項をより焦点化した「重点指導事項」を作成したりして、各都道府県の競技委員長（部長）を通じて、各校の顧問が日常の指導の中で生かせるよう配慮しています。

また、毎年勝浦で開催されている全国高等学校・中学校剣道（部活動）指導者研修会（今年度は10月7日（土）～9日（月）実施）の折にも取り上げています。

2 解決に向かっている課題

- (1) 礼法の中の正しい蹲踞に関する事項（剣道指導要領 P44.45）
- (2) 剣道着・袴・剣道具・竹刀・鰐などの用具全般の華美に関する事項

3 現在継続指導中の課題

- (1) 団体の礼の前後や選手交替時における余計な所作に関する事項
（円陣を組んでの発声やパフォーマンス・胴づき等）
- (2) 面紐の長さ結び目の位置に関する事項
- (3) 「鰐競り合いの解消途中」での時間空費に関する事項（おおよそ3秒の解釈等）
- (4) 公正を害する行為「変形な構え」に関する事項
- (5) 試合中の「かち上げ」「振り倒し」等危険行為に関する事項
- (6) 適切な指導（体罰暴言等）に関する事項（通知）
- (7) 竹刀の安全に関する事項（通知）
- (8) 新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法に関する事項

※ 以上の課題については、「1 方向性」で述べたような順序で各ブロックや各都道府県への浸透を図ってきました。今後も同じ流れで課題解決に努め、審判会議・講習会、監督者会議、調査等でも常に課題として取り上げていきます。

令和5年10月 2日

(公財) 日本中学校体育連盟
剣道競技部 各ブロック長 様
各都道府県剣道専門委員長 (部長) 様
各中学校剣道部顧問 様
各地域スポーツ団体等代表者 様

(公財) 日本中学校体育連盟
剣道競技部長 山下 克久
(公印省略)

剣道部活動における適切な指導について (通知)

秋冷の候、貴職におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

日ごろ、(公財) 日本中学校体育連盟剣道競技部に格別のご協力とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、(公財) 日本中学校体育連盟剣道競技部では、昨年10月1日付けで「剣道部活動における適切な指導について」の通知を出したところです。

つきましては、改めて下記について、関係の皆様にご確認いただき、全国の各中学校および中体連加盟の地域スポーツ団体等の活動において、適切な指導が実施されますようお願いいたします。

記

(1) 人格や人権、自主性の尊重

部員の人格を否定したり、人権を侵害する体罰や暴言は、部員や保護者との信頼関係を著しく損ない、重大な問題へと発展してまいります。部員一人一人の個性を尊重し、「剣道の稽古を通して人を育てる」ことを心がけてください。

(2) 発達段階を考慮した稽古

部員の発育・発達段階によって、目的、頻度、運動強度、持続時間、稽古の種類などを組み立てることが大切です。これらを見ない稽古やトレーニングは、障害や意欲低下を招くおそれがあります。生涯にわたって剣道を愛好していけるよう、適切な指導を心がけてください。

(3) 勝利至上主義に陥らない

多くの部員が「勝利」を目指し、指導者も同じ気持ちで指導にあたります。勝つために努力することを通して、成長できる要素はありますが、「手段を選ばず、ただ勝てばよい」という考えが先行し、指導者の要求レベルが高過ぎると、部員を追い込み、体罰や暴言といったトラブルが発生することも懸念されます。指導者と部員と保護者が三位一体となって、チーム目標や個人目標を確認・尊重して、将来的な人格の形成を見据えて指導にあたるよう心がけてください。

※ 以上、部員が日常の稽古や試合を通して、心と体のバランスを保ちつつ、「剣道を続けて良かった」と感謝できる環境づくりを是非ともお願いいたします。

令和5年10月 2日

(公財) 日本中学校体育連盟
剣道競技部 各ブロック長 様
各都道府県剣道専門委員長 (部長) 様
各中学校剣道部顧問 様
各地域スポーツ団体等代表者 様

(公財) 日本中学校体育連盟
剣道競技部長 山下 克久
(公印省略)

剣道部活動における竹刀・防具の安全及び事故防止について (通知)

秋冷の候、皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、昨年10月1日付けで、「剣道部活動における竹刀の安全及び事故防止について」の通知を出したところです。皆様のご理解とご協力のおかげで、竹刀の破損による事故は少なくなっておりますが、面紐の結ぶ位置や稽古着の袖の長さなど、まだまだ指導が行き届いていない点も見受けられます。

つきましては、生徒の安全と生命を守る観点から、日頃の稽古や大会前の十分な点検整備を習慣化するとともに、剣道場の環境整備等を行うなど、事故防止について万全を期すようお願い申し上げます。

記

1 稽古において

- (1) 竹刀点検の徹底 (開始前・休憩時・終了時・稽古中も適時)
 - ・ 破損(ささくれ等)、不備 (先革破損・弦及び中結のゆるみ) のものは使わせない。
- (2) 剣道具の確認
 - ・ 面金 (物見部分) が変形し幅が広がっているようなものは使わせない。面紐の結び目が高い生徒は直すよう指導する。

2 大会・錬成会等において

- (1) 公式戦 (県大会・各地区予選会) での対応
 - ・ 竹刀検量を実施し、検量を合格した竹刀のみ使用可とする。
- (2) 顧問・監督・外部指導者等による竹刀点検の実施
 - ・ アップ開始前及び試合開始前に点検を行う。検量済み竹刀も同様。
- (3) 破損・不備等ある竹刀の没収
 - ・ 竹刀検量時に確認し預かる等の処置を行う。大会終了後に返却する。
- (4) 活動方法の工夫
 - ・ 会場の広さに応じた適切な人数や活動形態を工夫し、稽古や試合ができるようにする。

3 日々の活動を通して

- (1) 竹刀点検の習慣化
 - ・ 竹刀の状態を常に保守点検する習慣を身に付けられるように指導する。
- (2) 剣道具を正しく装着
 - ・ 剣道着、袴、剣道具を正しく装着できるよう指導する。
- (3) 剣道場の環境整備
 - ・ 掃除が行き届き、清潔な環境で稽古できるよう指導する。

(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部
顧問・部長・各ブロック長の先生方へ
各都道府県専門部長(委員長)の先生方へ

令和6年度(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 審判員共通認識事項 変更・追記箇所について

(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部
四国ブロック長 西山 和輝

「四国全中剣道 審判員共通認識事項」から変更・追記した箇所は以下の通りです。よろしくお願ひします。

1 (公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 ブロック長会議より

(3)団体戦の代表者戦、個人戦での延長戦について

- 「休息・給水」を「休憩」に変更しました。また、「試合再開までの時間は5分」とさせていただきます。
- 審判員の所作を追記しました。

2 審判員共通認識事項

(1)つば(鏝)競り合いについて

- これまでは「定義」のみを記載していましたが、全中の反省を踏まえ、「運営要領の手引き」から刃部にかかるとことや暴力的なこと、主審の専決事項等の内容を追記しました。

(4)「つば(鏝)競り合いの解消の際の見極め」を追記しました。

(9)合議後の説明から反則の宣告までの流れについて

- 全剣連の指導に準じる形で「合議後、主審はそのまま残って説明に入る」形に変更させていただきます。

(13)竹刀を落とした場合の判断について

- 見苦しい行為とその例を追記しました。

(14)「倒れたとき、相手の攻撃に対応することなく、うつ伏せなどになる行為は、反則を適用する。」を追記しました。

(23)団体戦における先鋒戦の開始の宣告について追記しました。

3 問い合わせ先について

令和5年度内は引き続き西山、次年度からは山下部長となります。

【本件に関する問い合わせ先】

(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 四国ブロック長
まんのう町立満濃中学校(香川県)
教諭 西山 和輝

0877-73-2107 (学校TEL)

0877-73-4685 (学校FAX)

manno-j@manno-j.edu.town.manno.kagawa.jp(学校代表アドレス)

※原則、各地区ブロック長や各県専門部長を通してご連絡ください。

令和6年度(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 審判員共通認識事項

今年度、愛媛県松山市で開催された四国全中の開催に当たり、「(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部申し合わせ事項」や「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合審判法」等について、各都道府県の審判員が共通認識のもと、自信を持って取り組むことを目的として、「四国全中剣道 審判員 共通認識事項」を作成し、各県・各ブロックが審判研修の際に活用していただきました。

令和6年度からは、開催ブロックの全中に特化した形ではなく、「(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 審判員共通認識事項」として運用していくこととし、下記のとおり、四国全中の反省等を踏まえて、アップデートしました。

ここに示す内容は、審判員のみならず、日々の稽古など様々な場面で、選手や指導者とともに共通理解を図る場面を設けることが重要だと考えます。また、令和5年度から段階的に始まった部活動の地域移行を見据え、地域スポーツ団体等と連携を図っていくことも重要です。

選手や指導者、審判員が共通の認識を持ち、一体となって「正しい剣道」、「正しい試合」を醸成していくために、本共通認識事項が活用されますよう、皆様の御協力をよろしくお願いします。

1 (公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 ブロック長会議より

(1) 令和5年4月1日に全日本剣道連盟試合・審判委員会から発出された「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合審判法」「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法運用の質問事項及び解説」は、中体連でも適用される。

○ つば(鏢)競り合い解消に至る時間は「一呼吸(目安としておよそ3秒)」。

○ つば(鏢)競り合いを解消する場合は双方がバラバラに下がる。また、双方が徐々に下がるのではなく、正しい「つば(鏢)競り合い」から鏢と鏢で競り合う(押し合う)力を利用して一気に下がる。

○ マスクの着用について

【選手】 ・面をつけている時・面マスクまたはシールドを着用する。
・面をつけていない時・個人の判断とする。

【審判員】 ・マスクは着用しない。ただし控え席でのマスク着用は個人の判断とする。

(2) 一気に下がる指導と反則について

○ つば(鏢)競り合いの分かれ方は今まで通り。一気に下がることを指導していくが、それができていない場合、直ちに反則にはならない。ただし、再三繰り返されたり、お互いに気持ちを合わせて分かれなかったりした場合は反則が適用されることもある。

(3) 団体戦の代表者戦、個人戦での延長戦について

○ 延長戦は2分ずつ区切って行う。

・ 試合時間3分⇒延長2分⇒延長2分⇒【小休止(深呼吸をする程度)】

⇒延長2分⇒延長2分⇒【休憩(面を外して給水)】

※上記を繰り返す。

【小休止】 ⇒ 開始線の位置で10秒程度の深呼吸。

【休憩】 ⇒ 立ったまま納刀し、待機場所に戻って面を外し、所定の場所で水分補給を行う。試合再開までの時間は5分とする。

<審判員の所作>

【小休止】 審判員は試合者に「その場で深呼吸しましょう」と促す。

【休憩】 左手に審判旗を持ち、右手を右斜め下方に伸ばし、手の平を下に向け「休憩」と宣告する。

(4) 裏交差について

- つば(鏢) 競り合いの際、裏交差になっている場合は、正しいつば(鏢) 競り合い(表交差)に戻してから、
或いは戻しながら解消する。再三繰り返したり、意図的な行為と判断されたりした場合は、合議の上、反則を適用する。
- 裏交差のまま分かれると直ちに反則になるものではなく、意図的に裏交差にする場合や、一方が表に戻そうとするところを合わせずに分かれる場合などを繰り返し、明らかに公明正大に試合をしていない場合について反則の対象とする。

2 審判員共通認識事項

(1) つば(鏢) 競り合いについて

- つば(鏢) 競り合いの定義

「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P9 三「規則の解釈と運用」 2「つば(鏢) 競り合いについて」
つば(鏢) 競り合いは、鏢と鏢とが競り合って互いが最も接近して緊迫した間合である。つば(鏢) 競り合いは攻防や打突行動の中から発生した相対関係である。

- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」三 2 P10～11 より

- ・ 終始、拳が相手の刃部にかかっているような場合は、明らかに不当なつば(鏢) 競り合いである。
- ・ 暴力的であったり、意図的なひっかけ(ひっかけることを目的にする)や、一般的に見て異常な行為であれば、禁止行為に該当する。
- ・ 膠着や不当なつば(鏢) 競り合いに関する処置は、試合の運営にかかわる主審の専決権限の事項である。したがって、副審は「止め」を宣告することができない。

(2) 「一呼吸(目安としておよそ3秒)」について

- 目安の根拠・成人安静時の1分間の呼吸数は約12回から20回とされていることを参考に「一呼吸=およそ3秒」となった。

(3) 「一呼吸(目安としておよそ3秒)」で分かれることができなかった場合の審判員の対応について

- 剣道試合・審判規則第1条に則り、公明正大に試合ができていないと判断した場合は反則となる。
- 一気に下がる部分は指導していくが、気持ちを合わせて下がっていれば反則とはしない。
- ゆっくり下がって故意に時間をかせいだり、相手と気持ちを合わせずに分かれる、または相手を一方的に下がらせたりするなどのなどの行為は、第1条に照らして反則とする。
- 「一気に」というのは、必ずしも1歩ではない。一呼吸(目安としておよそ3秒)の間で2～3歩かけて間を切ることもあり得る。
 - ※ 正しいつば(鏢) 迫り合いと分かれ方について、指導者・選手に指導していくことが重要である。
 - ※ 再三(2～3回程度)繰り返したり、意図的な行為と判断されたりした場合は、合議の上、目的と現象を見極めて反則を適用する。

(4) つば(鏢) 競り合いの解消の際の見極めについて

「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法運用の質問事項及び解説」 2(5)
解消の際に一本先取された試合者が早く勝手に下がったり、逆に先取した試合者はなるべく時間を掛けて分かれるような場面が見受けられる。一般的に先取した方の先取を時間空費の反則にとる傾向が見受けられるが、目的と現象をよく見極めて総合的に判断する。

(5) 公明正大に試合ができていないと判断される攻防について

- 意図的な時間空費や防御姿勢(勝負の回避)による相手に接近するような行為は、規則第1条に則り反則を適用する。審判員は以下のような場面を見逃さず、「公明正大に試合を展開する」ことを優先させ、選手達が正しい試合、正しい剣道ができるよう厳正に判断する。
 - ・ 「変形な構え」となるまで左拳は挙げていないものの、巧妙に防御姿勢(勝負の回避)をとって相手に接近したり、意図的に時間空費を行ったりする。
 - ・ 時間空費が目的と思われる打突を繰り返す。

- 途中で技が出せない状態に陥って、一方の選手が積極的に分かれる努力をしているのに、もう一方の選手が分かれる努力をしなかったり、不当な行為（竹刀を叩く、押さえる、払う、巻く、さがっている相手に対して追い込むなど）を行ったり、姑息な打突をしようとしたりしていると判断されたときは、反則を適用する。
- (6) 全日本剣道連盟試合・審判委員会から発出された『新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法運用の質問事項及び解説』「2 質問事項」(2)の解説「再三(2～3回程度)繰り返したり、意図的な行為ならば合議の上、目的と現象を見極めて反則を適用する」の解釈の整理について
- 明らかに意図的な行為であれば即座に反則とする。
 - 意図的な行為とは断定できないものの、疑わしい行為が再三繰り返されれば反則とする。
- (7) 分かれの宣告について
- 『新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法運用の質問事項及び解説』「2 質問事項」(6)に記載してある通りとする。
 - 膠着した場合は「分かれ」をかける。「分かれ」をかける場合は正しい「つば(鏝)競り合い」を行っている事が前提である。基本的に膠着がみられる場面はごく限られているため「分かれ」の多発にならないようにする。また、安易に両者反則としない。
- (8) 合議について
- 合議の最中にジェスチャーは行わない。口頭で合議を行う。
 - 合議は相談ではなく、確認である。短時間で行う。
- (9) 合議後の説明から反則の宣告までの流れについて
- 合議後、主審は定位置には戻らず、その場で選手を待つ。選手が開始線に出てきて構え直したら近付いて説明を行う。その後、定位置に戻り、旗表示をした後、反則を宣告する。
- (10) 反則を適用する際、反則名は宣告するのかどうか
- 選手に説明をしたうえで「反則1回」と宣告する。(反則内容は監督にも聞こえるように説明する。)
※「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合審判法運用の質問事項及び解説」(4)参照
- (11) 「押し出しの反則」なのか「場外反則」なのかの見極めについて
- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P25 〈主な事例の解説〉
- 〈事例5〉体当たりと押し出しとを区別する判断の基準はあるか。
- ① 打突後の体当たりや相手を崩して打突するなど、打突に結びつく行為でなければ不当な押し出しになる。
 - ② 打突の意志がなく、押し出す目的であったのか否かを見極める。
 - ③ 堪えられる程度の接触なのか否かを見極める。
- (12) 竹刀を落とした場合の判断について
- 竹刀を落とした者の「反則」とする。ただし、故意に相手の竹刀を落とすことを目的とした行為(何度も竹刀をたたき、竹刀をひっかける等)であれば、公正を害する行為として、その行為を行なった者の「反則」とする。
- 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P25 〈主な事例の解説〉
- 〈事例3〉一方が自分の竹刀で相手の竹刀を強く叩いて落とした。強く叩いた側が反則になるか、それとも落としてしまった側が反則になるか。
- ① 攻防の中で叩いたのであれば不当な行為にはならない。落とした側を反則にする。
 - ② 強く叩いた行為が見苦しい場合は、第1条の本規則の目的に照らして反則にする。
- (13) 変形な構えに対する左小手への打突について
- 有効打突の要件・要素を満たしていれば1本となる。

(14) 倒れたとき、うつ伏せ等による相手の攻撃に対応する意志が見られない行為は、反則を適用する。

「全日本剣道連盟剣道試合・審判規則」 P11 細則 第16条5

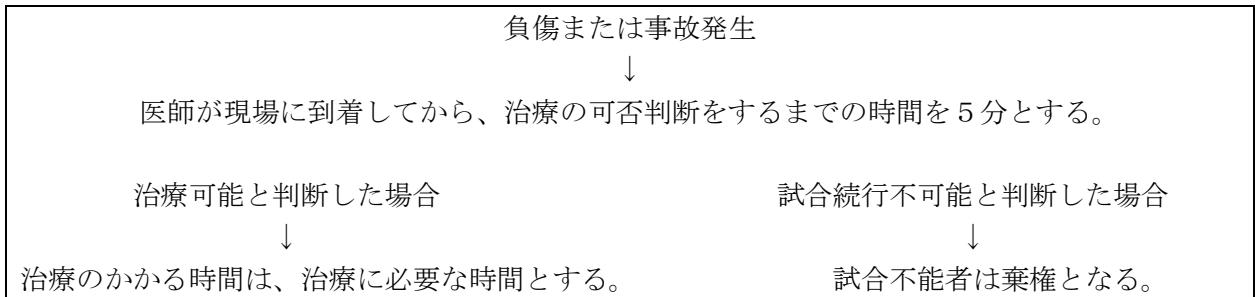
(15) 片手を放しての防御姿勢について

- ・ 返し胴を打突した後など、後打ちを避けるために右手で竹刀を持ち、竹刀および右手・右腕で面、柄部で小手、左腕で胴を隠して防御する行為。
- ・ 身体接触等で崩されて片手が竹刀から離れた際、同様な形で相手の打突を避けようとする行為。等

○ 一瞬ではなく一定時間以上その姿勢を取った場合、原因と現象を見極めて反則を適用する。

(16) 負傷または事故発生時の対応について

① 試合者が負傷などした場合は、次の要領で処置をする。



② その時の状況により、審判主任の判断で相手選手の対応をする。監督からの指導は認めない。審判員についても試合者に準ずる。

※ (公財) 全日本剣道連盟剣道試合審判規則・細則第2節「審判の処置」による。

(17) 異議の申し立てについて

「全日本剣道連盟剣道試合・審判規則」 P22 規則

第35条 何人も、審判員の判定に対し、異議の申し立てをすることができない。

第36条 監督は、この規則の実施に関して疑義があるときは、その試合者の試合終了までに、審判主任または審判長に対して、異議を申し立てることができる。

○ 規則の実施に関して、監督自身の理解が不十分な場合や、選手を一旦落ち着かせるような意図などで異議の申し立てが行われる疑いがある時などは、審判主任や審判長は毅然と対処する。

(18) 「公正を害する行為」と「時間空費」の見極めについて

○ 時間空費を目的として公正を害する行為を行うことも考えられるため、総合的に判断する。

○ 公正を害する行為

- ・ 意図的に表から裏交差にする行為
- ・ 分かれる際に不要な動き(おさえる、巻く、逆交差にする、肩にかけて分かれるなど)をする行為

○ 時間空費

- ・ 意図的にゆっくり下がる。または、相手を下がる行為
- ・ 勝負の回避、手をあげて相手に接近する行為

※ 審判3名の中で、2名は時間空費、1名は公正を害する行為というように判定が割れる場合もある。

(19) 主審の専決事項と副審からの合議について

○ 「剣道試合・審判規則 同細則」 P18 規則 第2章審判 第1節審判事項 および

「剣道試合・審判・運営要領の手引き」 P8「合議」

○ 「剣道試合・審判規則 同細則」 p16 規則 第24条③「副審は…運営上主審の補佐をする。なお、緊急のときは、試合中止の表示を宣告することができる。」

- ・ 不当な「つば(鏢)競り合い」および意図的な「時間空費」や「防御姿勢による接近する行為」以外で、危険・違法・不当な行為があったとき。(場外に出たか出ていないか、竹刀を離し操作不能になった、相手の竹刀を握った、刃部を握ったなど、見落としや見誤りがあった場合など。)

- 一方の試合者が不利益を被るようなことはあってはならない。暫定的な試合審判法に関する判定について、誰が主審になっても主審の専決事項を適切に判断できるよう、数多くの研修の機会を設けていきたい。
- ※ 審判研修の一環として、暫定的な試合審判法に関する共通理解を十分に図るために、地区大会や県大会において、副審からの合議を認める形で実施することがあるかもしれない。その際は、上記に示した主審の専決事項や副審の任務についての共通理解を図った上で実施する。

(20) 審判旗の巻き方について

- 審判旗の巻き方(縦巻きか横巻きか)に決まりはない。大会ごとの申し合わせ事項により決定する。

(21) 「変形な構え等の防御姿勢」について

- 「変形な構え」で微妙な場合は複数回見ること。明らかな場合は即指導をとる。左拳の位置、剣先(けんせん)の上がり具合が判断基準となるが、微妙な形を繰り返す場合、合議を掛けて確認をする。
- ※ 変形な構えによる防御姿勢で相手に接近するなど、意図的に勝負を回避する行為は、反則を適用する。

(22) 試合開始時の蹲踞・「始め」の宣告について

- 正しい蹲踞、竹刀と目印をきちんと確認してから「始め」の宣告を行う。
- 開始線で蹲踞もしくは構えた状態で、選手の竹刀や体が動いている場合はきちんと静止させる。

(23) 団体戦における先鋒戦の開始の宣告について

- 大会運営をスムーズに行うため、監督が畳に座ったことを確認してから「始め」の宣告を行う。
- ※ 監督は、チーム間の始めの礼の後、速やかに前列畳に移動し、選手を待たずに着座する。
- ※ 選手は、前の試合のチーム間の終わりの礼の後、直ちに2列目の畳から立礼の位置へ移動し、チーム間の始めの礼を行う。面・小手・竹刀の移動は、チーム間の礼が終わった後に行う。

【本件に関する問い合わせ先】

(公財)日本中学校体育連盟剣道競技部 四国ブロック長

まんのう町立満濃中学校(香川県)

教諭 西山和輝

0877-73-2107 (学校 TEL)

0877-73-4685 (学校 FAX)

manno-j@manno-j.educity.manno.kagawa.jp(学校代表アドレス)

※原則、各地区ブロック長や各県専門部長を通してご連絡ください。